竣事今年三月歸寺、其話云。蝗蟲の事歸郷の後、負攀の稱を承候。九州等は不承事に候。彼邊にてはこぬかむし又はうんかと申候。形狀を圖し候も甚敷違ひに候。形は蚊に似候て猶小さく、首三角に候。所のもの共、冠を蒙り候と申候は三角故に候。扱稻苗一本に數百付候。蟲付候ては二三日中には必倒れ候。此蟲起り候て以來、猫・犬・牛・馬、悉く熱病を煩ひ、後には亂氣いたし狂亂の様走り候。人制し候へば嘔ひ付候。一度被噬候ものは、其病染候か熱病にて無程死失申候。か様の儀にて牛馬悉く斃候。民間の餓死は夥敷様子、四分許は死失候様に存候。當年麥作迄、可致存命躰とは不被存候。薩摩殿領分迄は左程に不相見候。其外は歴々と申もの共も、粟飯の内へ少許米を雜ぜ候て給候。其身旅行不入もの、如何様の災難に出逢可申も難計候間、半途より罷歸候様にと申聞候もの、甚多く候得共、師命も重く又は難參儀に付、不殘相勤候。其間の艱難難申盡候。

知れ、其外三人有之候。彦兵衛は遠島、外三人は追放被仰付候旨、三月二十四日來狀に申來候。

殿主 彦兵衛 二十五歳

右正月二十六日御成の節、船町にて還御の段も不憚、所をも爲噪候事不届に付、隨分惡敷嶋へ重遠嶋。但出船迄入牢。三月五日被仰渡候。

善 八

徳兵衛

忠兵衛

右三人同斷の事に候得共、彦兵衛とは違候事。重き追放。

一、數寄屋橋御堀の大蟹

三月五日、數寄屋橋御堀より出候大蟹の事。色は如朱にして腹は鼠色、甲は四尺四方餘、兩足徑り八尺、鱗並惣足に鬚有之如錐也。甚力つよし。但人足共即時に打殺し、御城中に上之候。

一、徳川吉宗蹴鞠を覽る

三月十六日小菅へ御鷹野の節、淺草傳法院へ爲御休御成、蹴鞠昭覽有之。傳法院僧正・今戸町鞠取次如仙・御藏前米屋

一、江戸騷擾の張本人處罰

江戸御城下高間事に付、騷動の張本人般主彦兵衛と申者相

忠兵衛・室町茶屋七郎右衛門・淺草池田庄次郎・右之者共へ被仰付候。

一、富山城下米騷動の事

當四月五日夜中、越中富山御城下騷動の事。富山領一向津留にて米買共甚難儀仕候。依之手入いたし其上に百姓願御貸米千五百石を、米買七人より出し可申候。十年或は十五年の年賦にて取立可申候間、三千石津出願候旨申立其通と有之、三千石被申渡候へば一日の内に米價甚上り候。富山にて三千石は例に過分の津出にて、御當地十萬石にも向候由。此儀を末々町人共憤り、最初は百人許、後は三四百人餘にも成候由。下條屋彌三兵衛と申者の方へ一番に押懸、家諸道具・衣類・銀子・銀札散々微塵にいたし候。家内の者は逃去候。夫より茶屋次兵衛・高岡屋太郎兵衛と申者方へ、段々參候て同様に仕候。夫より米屋五右衛門・打出屋加兵衛方へ參候時分、町奉行初出合、大繩を張り防候故、川向島屋喜兵衛・羽根屋甚兵衛方へ志參候へば、舟橋の橋板はづし置候。其内に猶豫有之退散仕候。大抵よりは騷動の由。高間がにせをいたし候。郡方貸米を町人より爲貸渡候圖り

も、江戸御沙汰うつり候故に候。下よりも又うつし候か。右は新川邊在住の役人より申來候。